

「創造」

創世記 二章四〇―九節、一五―二五節

南山教会 二〇二五年一〇月二六日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日も一緒に、みことばに聴きましょう。

聖書の物語はでたらめな神話にすぎないとして、否定してしまう人がいるのは、事実です。自然科学が究明しようとしていることは、自然現象の生成過程についての客観的な事実の解明です。それに対して聖書の記している創造物語は天地の起源という物語を通して、この世界の存在の意味や、人間の生きる目的についての真理を知ることだと言えるでしょう。創世記の天地創造は、世界がどのようにして成立したか、を説明するために記したのではなく、世界と人間の存在の意味はどこにあるのか、という根源的な課題に答えたものです。

イスラエルはこの創造物語において、歴史を開始し、これを治め、これを審き、かつ救う全能の主なる神を告白しているのです。この言葉の根底には一切のものの造り主である創造者への賛美と神への服従があります。

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらずあ

らゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。」(七〇九節)

人間は「土の塵で造られ、他の動物も「土」で造られています。これは人間が物質的な面から見れば、他の動物と共通性をもっていることを示しています。「土の塵」という表現に、人間のはかなさ、もろさがよく表されています。やがて人間は「土の塵にかえる」(三章一九節)もの、死ぬべき、朽ちるべきものです。しかし人間は、神の「命の息」によって「生きる者」とされています。人間は息をしながら生きる存在であり、「息」は、ヘブライ語では「霊」をも意味します。人間は、神の特別な恵みによって、他の動物とは違った尊い人格として造られています。「エデン」とは元来は地名ではなく、イスラエルでは「至福」という語と関連づけられます。「水が豊かにあるところ」(二・三章一〇節)という意味で、「エデンの園」は、荒れ野の中のオアシスの意味で理解されていました。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』」(二・五、一七節)

神はエデンに園を造り、人をそこへ置き、耕作させ、守るようにされました。「善悪の知識の木」からは、決して食べてはならない、命じられました。「善悪の知識の木」の、「善悪」は「すべて」を意味し、「知る」ことは「できる」ことに通じるところから、「全知全能」すなわち神のようになることができるという意味になります。人間が他の動物とは違って、尊い人格、自由な主体として生きる者とされていることを示すのが、エデンの園の「禁断の木の実」です。禁断の木の実が人間だけに与えられていることこそ、人間が「自由な人格」として造られてい

ることを知ることができなのです。人間は与えられた自由を用いて神に従うことも、神に背くことも出来るのであって、そのことが人間が自由な責任ある主体であることを示しています。

「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』……主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。『ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャ）と呼ぼう。まさに、男（イシュ）から取られたものだから。』こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」（一八、二一―二五節）

「独りでいるのは良くない」の「良くない」は、目的、理想などに照らしてみて「かなってない」の意味です。人が本来共同体的人格として造られたものであることを物語っています。男だけでは真の人間の創造にはならないのです。「助ける者」も「助け合って生きる相手」のことであり、人を孤独から助けるのに最もふさわしいパートナーという意味で。人には、「彼に合う助ける者」、共存者、協力者が必要です。人間は本来神との関係の中で造られたものです。人間も、互いに向い合う人格的な関係が必要なのです。共同存在を本質としている人間が、他者と共同して生きることが出来ない悲惨は、罪の結果生まれたものです。人の「あばら骨」の一部で女を造ったとは、人間の愛情の座である胸からということであり、男女とも同じ材料から造られたということです。機能の違いはあっても、男女の存在の平等性が言われています。「わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」は、親密な共同体関係にあることを言い表します。「一体となる」は、肉体的な性関係だけではなく、人間の実存の全領域にかかわる共同体的一体性を意味

しています。人と人との交わり、夫婦の関係についての素朴な表明がここになされています。夫婦の関係が、親子の血縁関係よりも強いものとされています。「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」ここでの「恥」の感情は、性的羞恥心というよりも、むしろ「裸」と関連しており、自分や自分の弱さをそのまま相手にさらけ出して、お互いに裸であることを認め合えないような関係の欠如が「恥」という感情で表現されています。

創世記の人間の創造、男女の創造物語は、科学以前の時代の産物でもないし、幼稚な思考の結果といったものではありません。そこには神話的表現を借りながら、深い真理が語られているのです。人間存在のあるべき姿が示されています。それは現代人にとっても有益な神のみことばであることには変わりありません。